

Episode

5

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE



フェイク・ガンプラを許さない!!
ジムとボールの前に現れた
熱き男の正体とは?



ガンダムビルドダイバーズ
ジムとボールの世界に挑戦!

「そんなのどっちでもいいじゃない！」

その一言が、愛する人との破局のきっかけだった。

彼は、タイバーネームをヤマタツといった。ガンブラを愛し、GBNを愛し、そして彼女とは数日のちに結ばれる約束だった。しかしそんな彼女を、彼は一度もGBNに誘おうとはしなかった。なぜならヤマタツにとってGBNは、少年が宝物を抱き籠もる秘密基地のような、誰にも侵されたくない特別な領域だったからだ。

彼女にはそのことがたまらなく寂しかった。
星が綺麗な夜だった。

二人は週に一度行きつけにしているレストランで夕食を楽しんだ。顔なじみのシェフの腕が相変わらず見事だった一方で、彼女の様子がなにやらいつもと違っている。はにかんでいるようで、恥ずかしそうで、どこか悪戯げで。

「どうかしたの？」

ヤマタツはたずねた。

しばらく躊躇する間があったのち、彼女は思い切ってバッグからそれを取り出すと、掲げて見せた。

ガンブラ……？

「うまれてはじめて組み立てたから、上手じゃないと思うけど……」

彼女はヤマタツの表情をドキドキと、嬉しそうにのぞき込んで、

「わたしもあなたと一緒に、GBNにログインしたいな！」

「GBNにログインって……」

ヤマタツは思わず啞然と告げた。

「そんなガンブラで？」

「………え？」

彼の身体の芯にカッと熱い憤りが込みあげてきた。確かに彼女のガンブラは組みも塗装も仕上げも目を覆うほどに拙かった。しかし、それが理由ではない。ヤマタツを憤怒させたのは、

「それ、『ガンブラ』じゃん！」

「………え？」

届いたからだ。

「二四時間待ってたのに来なかったときは、正直やられたって思ったけど、牡蠣にビンゴして腹壊してたんじゃ、そりゃしょうがねえよな」

「うん、のぞみん似とまゆゆん似のあんないい子たちが、訳もないのにドタキャンするわけないと思ったんだ」

「ま、結果オーライってヤツじゃね？」

「え？ なんて？」

「なんてって……」

ジムはボールの手もとをのぞいた。

前の戦いで、180mmキャノンに代わってポリポッドボールに装着され、高らかにブチ・ルー・サウンドを奏であげた巨大スピーカーが、今は作業テーブルの片隅にしょんぼりうち捨てられている。

「あの子らに見られなくてよかったじゃん、試行錯誤の旅の途中」

しかし見れば、脱落したスピーカー以外にも、ポリポッドボールの脳天の座を虎視眈々と狙うメインウェポン候補は、まだまだあとに控えているようだ。

「まあ、迷いの森からはまだまだ抜け出せなさそうだけどもさ」

「そういえば」

ボールは、候補のパーツを愛機の脳天にあれこれ載せ替えている手をとと止めて、思い返した。

「あの百式のスナイパーライフルってさ……」

「めちゃくちゃ精度いいくせに、馬鹿みてえなパワーだった、アレ？」

「そ、あのライフルのシルエット、どっかで見たような気がするんだよね」

時間を巻き戻そう。

コアなファン層からの濃厚なる声援のなかライブを終え、限りなくポツポツと近くに近づくショット撮影をこなし、ハコの近所にある二四時間営業のチープな居酒屋で、愚痴を肴に打ち上げをはじめた。ノズとマーキーは気づけば、他のメンバーが全員八ヶたあとも二人きり、まさに丸一日ぶっ続けて店の全種をチャンポンしてしまっていた（ちなみに二人は、他のメンバーがいない時には、決して互いを『のぞみん』『まゆゆん』とは呼び合わなかった）。

「ねえ、マーキー」

「フェイク・ガンブラだよ！」

「………え？ これ……偽物？」

「なんでそんなモン買ったんだよ！」

まわりの客が目にするのも忘れて、声を荒らげる。

「だって……ネットのお店、そんなこと全然……」

「そんなふざけたガンブラでGBNにログインしようっていうのかよ！」

きつと喜んでもらえると期待していた彼女は、戸惑いうるたえ、思わず、

「本物だろうと偽物だろうと、そんなのどっちだっていいじゃない！」

彼女にとっては単なる売り言葉に買い言葉だったのだらう。

しかしヤマタツには……ガンブラを、GBNを、心より愛する彼にとつては、決して許されざるひと言だった。

非道く罵った気がする、詳しくは憶えていない。ただ、ひとり帰る道の途中で見上げた夜空の星が綺麗で、綺麗すぎて、その輝きが心の真ん中に突き刺さった痛みだけは忘れられないでいる。

あの夜以来、彼女から連絡はない。自分もGBNに逃げ込んだままだ。

いまになってみれば、正しくなかったのは自分の方だったのだからと理解できる。けれど、自分を憤らせたガンブラへの愛、GBNへの想いが間違っていたとは決して思わない。もちろん彼女も悪くない。すべては――

「……フェイク・ガンブラ……絶対に許さない……！」

決意をつぶやきにしたその時だった。

突然、まばゆい輝きが、彼を包み込んだ。

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

「………え？」

CHARACTER キャラクター紹介

ボール (アズマ・カール・トンプソン)



ポリポッドボールを運用する青年。大ファンであるブチ・ルーのメンバー、のぞみん似のノズと、まゆゆん似のマーキーと出会い、ふたりにたぐいしに心を奪われ中。ちょっとしたドタキャンなら受け入れるくらいの燃え上がり方をしているようで、じつは冷静な一面も……。一方、愛機ポリポッドボールの改良にも余念がない。

ジム (ティム・バレット)



パーティ大好きなプレイボーイであるジムも、ノズとマーキーには興味津々。しかし、彼女たちの真の目的をおぼろげながら感じるようになるも、あまり気にしている様子はない。なぜなら、自分たちの(ガンブラの)魅力で振り向かせれば良いと考えているからだ！ ガンダムストームプリンガーは主戦力として活躍中。

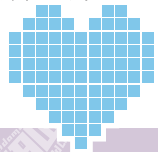
IDOL アイドル紹介

ノズ&マーキー

ジムゴールデン・ポリキャップを入手するため、ジム&ボールに接近したふたり。その正体は、ボールが大ファンであるブチ・ルーのメンバーであるが、本人たちはバンド活動にシフトする希望を抱いている。ゴールデン・ポリキャップがガンブラの関節に挟まっているものではないと知り、愕然とする。

ヤマタツ

ガンブラを、そしてGBNを愛する男。ガンブラではなく、「ガンブラ」を購入してしまった恋人に強い非難を浴びせ、別れに繋がった経験を持つ。そんなこんなでフェイク・ガンブラ「ガンブラ」への憎悪は強まっており、GBNからの抹消に命を賭けている。愛機はガンダムノイズキャンセラ。



めちやくちや精度いいくせに
馬鹿みてえな
パワーだった、アレ？

つーか、なんなんだよ
あのクソキュベレイに
クソ百式!

「……………ん……………?」
「な〜んか忘れてる気が、しない?」
「……………エイヒレ……………?」
「でなくて?」
「……………あん肝……………?」
「でもなくて?」

懲りずにマーキーが牡蠣酢をコールしようとした……その時、

二人は同時に叫ぶと顔を見合わせた。一瞬にして酔いが醒める。慌てて財布をひっくり返し会計を済ませると、全速力でガンダムベースに駆け込んだ。

「あいつらまだ遊園地ディメンションにいたりしないかな?」

「……………つか、二四時間待ってたら、逆に怖えけど……………」

急ぎGBNにログインした二人を——突然、漆黒の光が包み込んだ。前に謎の声からゴールデン・ポリキャップを見つめるよう告げられた、あの時と同じ闇だ。

「黄金のポリキャップについて、なにか掴めたか?」

同じ声が問う。

「持ってる奴見つけた!」

「……………接触する段取りをつけた……………」

「よくやった。では、まずはそのポリキャップについて十二分な情報入手しる。いいな、くれぐれも力尽くで奪い取ったりはするな。急いで仕事をし損ずる……」

告げると闇は消え、ノズとマーキーは気づけばフォースネストであるペントハウスにいた。再び顔を見合わせ、大きく安堵の息を吐く。

「あいつらの関節、もいでなくてよかったです……!」

「……………結果オーライ……………」

「だね、仕切り直してやつ?」

二人は、ダムドとクラッシュで遊園地ディメンションに急ぎ戻る計画を改め、ガンブラ・デートに行けなかった詫びと再度のデートの誘いとを、傾合いを見計らってジムとボールにメッセージすることにした。

眩しいのに、目が閉じられない、目を閉じていないのに、なにも見えない。包まれたまばゆい輝きの中で、ヤマタツはその声を聞いた。

「このゴールデン・ポリキャップは、お前を正しき道に、導いてくれる……」
輝きが引いた。
気づけば彼の手にゴールデン・ポリキャップが握られていた。
向かうべき行先を問う様に、そっと胸に当てる。

数日後、それは完成した。ヤマタツの愛機であるMGガンダムアストレイが、道徳と秩序の守護者としての使命を纏い、いま新たに立ち上がるうとしていた。

「さあはじめよう……我が唯一の盟友、ガンダムノイズキャンセラ……」

彼は決意した。このGBNに潜むであろうフェイク・ガンブラを……己と愛する者との絆を切り裂いたように、この愛しき世界を蝕もうと虎視眈々と時をうかがっている怨讐のノイズを、欠片のひとも残ることなくあぶり出し、浄化せんことを。

5-B

Sweet Child O' Mine

〜んなガキ共、甘いモン〜

「でももう少しでトコでボールのズラがズレちゃってさ——」

「違うって! 先にズラがズレたのはジムの方じゃん!」

「ま、どっちにしろそれで、オレらがなんちゃって女子だったの他の生徒にバレちゃって、やべえってなったんだけどさ、結局なんやかんやでガンブラ学園の学園長が3つ目のポリキャップくれて」

「って言うか、レジェンド・ガンブラのビルダーって全員『こいつが?』ってひとばっか……とか言いつつ、レジェンド・ガンブラってのが何なのか、僕らもぜんぜん解ってないんだけどお」

「……………」

そう言うつと、GBNで最近評判のスイーツカフェのテーブルで、ふわり可愛らしい装飾も上品な店内には似つかわしくない暑苦しい笑い声をあげるジムとボールを前に、ノズとマーキーは、ぼかんと唾然の口を開けたまま固まった。

「ごめんなさい、ちよっと確認させてもらっていい……………」

ノズは、質問をしぼり出した。

「それじゃ、ゴールデン・ポリキャップっていうのは、ガンブラの関節にはまつてるんじゃないの?」

「そ、実際にガンブラを使うヤツとは違うっぽい……飾りモン、みたいなな? GBNのなかでもべつにでっかくなってなくて……落つことすとどっか行つて見つからなくなるみたいいな、リアル世界のおんなじ、ちっこい感じ」

ジムがしれっと答える。

ノズは、持っているフォークを、手を拳にして握り直すつと、

「……………だったら、わたしたちはなんの為に、手当たり次第にガンブラひっ捕まえて、腕から足から何百本ともぎってきたのよ……………」

ぼそり吐き棄てながら、ハニーホイップがたっぷり乗ったパンケーキに突き刺した。

「え?」

「なに? もぎる……………」

ジムとボールが聞き返す。

咄囃にマーキーはノズの腕を掴み、彼女の口にパンケーキを押し込んで栓をするつと、

「……………えっと、その、あたしたち普段、映画館でチケットもぎりのバイトやって……………」

ノズもハッと笑みを作り、

「ほふはんへふう……………(そつなんですう)」

懸命に口の中のを飲み下すと、

「それにしてもこのお店、本当に美味しい!」

「でしょー! 僕が推したんだ!」

「パンケーキがいいんじゃないやねって言ったのはオレだけどー!」

無邪気に張り合う二人は、もちろんはぐらかされた事など気づいていない。

それどころか、ボールが、

「でもホントにゴメン、肝心なゴールデン・ポリキャップの実物、忘れてくるなんて」

素直に謝ると、ジムも続いて、

「ノズちゃんとマーキーちゃんに会えると思ったら、二人のことで頭中いっぱいになっちゃってさ」

「もつっ、そんなこと言われたら、怒るに怒れないじゃない」



機体紹介

1

ガンダムノイズキャンセラ

ダイバー・ヤマタツが、ガンブラの抹殺のために作り上げた、ガンダムアストレイベースの機体。GBN内のノイズ(=フェイク・ガンブラやバグ)を取り除くために開発された実験機。ダイバーの脳波信号を機体にフィードバックすることで、優れた瞬発力と反応速度を実現。さらに、時空を歪める無重力フィールドを強制的に生成することが可能であった。弱点は機動性を高めるために極端に薄くされた装甲で、被弾は致命傷に繋がる。

Episode
5-B

でもホントにゴメン、
肝心なゴールデン・ポリキャップの実物、
忘れてくるなんて

レジェンド・ガンブラの
ビルダーって全員
「こいつが?」ってひとばっか……

Episode
5-A

ノズは困り顔で肩をすくめ、隣のマーキーに小さな笑みを向けた。

「マーキーも笑みを返すと、ジムとボールに向き直って、」

「でも、いろんなお話聞けたし、すごく楽しかった……」

「本当に!?」

ジムとボールが同時に身を乗り出す。

ノズは、マーキーとともに圧倒されつつ、ほんのり頬を染めると、

「それに……」

嬉し恥ずかしげに目を伏せて、

「おかげでまた、二人と会える口実ができた」

「……………」

「……………」ほんとは尊敬するわ、あんたのその、いつでもどこでもどんな相手にだるうと、嬉し恥ずかしそうにほんのり頬染められる特技……………」

呆れ言いつつ並び歩くマーキーに、ノズは、

「ま、このワザ一本でウチのライブの物販、ほとんど支えてるようなもんだし」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

機体紹介 2

ポリポッドボール3変化!

A ポリポッドボールスピーカー (URUSA形態)

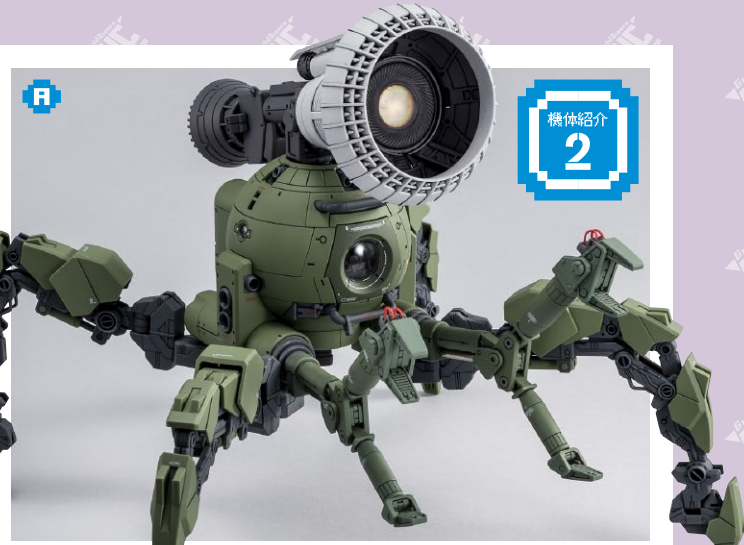
ポリポッドボールに専用の拡声器を搭載した応援仕様。エモーショナルなエネルギーが搭載されているという「フチ・ルー」の歌を大音量で響かせたが、他のパーツや装備にセンサーに干渉する問題点があった。

B ポリポッドボールトリプル (串団子形態)

ボール本体の上にボールが、さらにその上にはボールのようにハコが搭載された。その姿が串に刺さった団子のように見えることから、「相手に空腹を感じさせ、戦意を喪失させる」ことを想定していた。

C ポリポッドボールオクトパス (上を下への大騒ぎ形態)

ボール本体に脚部を4基増設した仕様で、オクトパスの名前は8基の脚部があるところから名付けられたようだ。ボール本人は、「上を下への大騒ぎ形態」と語り、敵を混乱させることを意図していた。



メンションでのガンブラ・デートを提案した。

観覧車やメリーゴランドやコーヒーカップを背にして凜々しく立ち二人を待つガンダムストームプリンガー、その隣にポリポッドボール、その脳天には、

「お前……それで来たんだ」

「前の時は二人に披露できなかったからさ！ それに今回は他のメインウエポン候補も連れて来たし！」

「見れば傍らには、ウエポンコンテナが二つ。」

「中身見んの怖いんですけど」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」



大切なものは……
Honesty

なら、これからオレらの
魅力、見せつけて
いけばいいんじゃないね?



「どっちだっていい、神聖なるGBNを犯そうとする穢れを、焼き払えるのならば……」
ヤマタツの想いが、ノイズキャンセラの骨格フレームによって増幅変位される。顔で紅に明滅していたセンサーが眩く輝いた次の瞬間、一帯が、機体マスクから拡散放出されたフィールドによって閉ざされた。

つい今までカラフルで可愛い遊園地だった周囲の景色が突然、おどろおどろしく厭わしい色彩に変化し、ジムとボールは驚き息を呑んだ。見回せば、空間が捻れるように不吉色の淀みが歪み、渦を巻きはじめている。
「……なんだよ、これ!?」

思わずジムが声を漏らす。次いで足もとの踏ん張りがフワフワと効かなくなり、遂には上下の感覚がなくなった。二人は慌てて機体のオペレーションモードをゼロ・グラビティにスイッチし、
「どうなってんだ! きつもち悪う!」

「もしかして、さっき聞こえた声のヤツのせいかも!」
ボールはハツとした。しかし、声の主の姿は見えない。

「また例のキュベレイと百式とか!?!」

「つか、なんでノズちゃんとマーキーちゃんとデートって時になったら邪魔が入んだよ!」
吐き捨て言うジムのストームプリンガーとボールのポリポッドボールが、無重量状態のなか、互いに頭と足の向きを反対にしつつ背中を合わせ警戒した——その時、空間一帯に向け、どこからか複数の砲火が速射された。ストームプリンガーが反射的にライフルを構え、相手を探す。

「攻撃!?! つつか、狙い全然外れてんじやん!」
一方でポリポッドボールが、メインウェポンである脳天の巨大スピーカーから、大ファンであるプチ・ルーの代表曲を、大音量で奏ではじめる。

「意味ねえってそれ!」
呆れるジムに、ボールは力強く、
「んな事ない! この曲にはプチ・ルーの溢れる情熱パワーが宿ってる! だって前のキュベレイと百式の時も、これかけたら相手撤退してっただじやん!」

しかし情熱パワー云々はさておいて、そのスピーカーにはひとつ問題があった。頭部全体を覆うほどの巨大さゆえ、接近・索敵センサーと干渉を破壊する。

ノイズキャンセラが姿を現した。
ジムは、憤りを剥き出し睨みつけると、
「どういことだよ! オレらがGBN汚すって!」
「……お前たちがノイズだからだ……!」
「だからわけ解んねえこと言ってるって言ってんだって!」
怒鳴り声をスタートピストルに、ストームプリンガーがノイズキャンセラに向かってダッシュする。力の限り殴りつけようとした——その拳を、ノイズキャンセラは易々とかわしすり抜けると、再度ポリポッドボールに向かって突進した。

「その醜い姿を、ノイズと言わずなんという!」
見ればポリポッドボールがその脳天に、破壊された大型スピーカーに換えて、ウェポンコンテナから取り出したもう一つのボールの胴体を、更にその上に八口を装着している。その容姿はまさに、
「相手に空腹を感じさせ、戦意を喪失させる、名付けて串団子形態!」
ボールはしりぞかず立ちむかおうとする。

「おぞましい!」
ヤマタツは我慢ならず怒声を叩きつけた。ノイズキャンセラが腕に装着してあるトンファー・ウェポンを転回させ、砲身を伸ばし、機関砲弾を連射する。ポリポッドボールの脳天に装着してあったボールと八口がまたたく間に破壊された。

そこへストームプリンガーが向かって来る。
ノイズキャンセラは今度も一撃離脱。
ジムは、その背後に必死に食らいつつと追う、しかし、
「オレのストームプリンガーが振り切られるだと……!」
凄まじいマニューバを見せるノイズキャンセラの背後から、ストームプリンガーが置き去りにされるように姿を消した。

ヤマタツは、小さく口もとを微笑ませた——寂しげに、
「お前たちのような悪しき者に、私の邪魔が出来るわけがない……絶対に許さない、私と愛する人とを引き裂いた者を……!」
再びポリポッドボールに視線を戻す。

見ればポリポッドボールが、今度は脳天に、もう一対の多脚を、足を天に向けた状態で装着している。
「視覚的に上下どちらを向いているかを惑わせ、バトルを有利に展開す

し、頭上方向に向けてのサーチに影を作ってしまったのだ。
その死角を巧みに突き、ヤマタツは——彼のノイズキャンセラは、それまで身を隠していたステルスウォール（隠れ壁）から飛び出すと、素早くポリポッドボールに急接近した。腕に装着したトンファーでスピーカーを殴打し、破壊する。
「!?!」

突然の攻撃にボールは何事かと驚きつつ、一撃離脱するノイズキャンセラを目で追った。
「MGアストレイ!? ……でも、あのシルエツト……!」

瞬発力特化のため極限までの軽量化を図り、最小限の装甲以外を脱ぎ捨てた機体は、まるで人間の骨格が鎧をまとったかの如き——その姿をジムも確認して、
「なんか生きモンみてえ!」
咄嗟にライフルを向け続けざまに撃つ。

しかし、放たれたビームは遠ざかるノイズキャンセラに到達する前にエネルギーを減衰し輝きを失ってしまう。何度撃っても。
「なんで届かねんだ!」
「まさか最初の速射の砲撃——」
ボールは気づいた、
「ビーム攪乱弾!」

「わざとばら撒いてたってわけかよ!」
その間に、気づけばノイズキャンセラは姿を消している。
「どこいったんだよあいつ!」
ジムはとっさにラジオ（交信）をガードチャンネル（緊急周波数）に合わせ怒鳴った。

「なんなんだよお前! なんでオレらのデートパリー邪魔すんだよ!」
「……愚問」
ヤマタツが声を返して来る。
「GBNを汚す存在だからだ……!」
「はあ!?!」
ボールは戸惑い、
「なにわけ解んねえこと言ってるんだ!」

ジムは、破壊されたスピーカーの残骸を掴むと、ノイズキャンセラの去った方を目掛けて投げつけた。偶然にもステルスウォールに命中しそれを



↑ゼロ・グラビティモードに放り込まれたストームプリンガーとポリポッドボール。ノイズキャンセラが生み出したサイケデリックなフィールドに引きずり込まれてしまったわけだが、ジムとボールの熱き心がヤマタツの心を動かした。

Episode
5-C

オレの
ストームプリンガーが
振り切られるだと……!

んな事ない!
この曲にはプチ・ルーの溢れる
情熱パワーが宿ってる!

Episode
5-C

